

はくかんぎん

善き頂きもの

第93号 H27年春号

伊豆市 法住寺 発行

洋明上人の大荒行再行、皆さま方のお力を頂きまして無事成満できました。心より御礼申し上げます。

*

修行が始まる日、家族で荒行堂へ見送った。荒行堂は千葉県市川市の法華経寺内にあり、境内中心にある祖師堂は国の重要文化財である。その大きな太い柱には江戸前期からの長い歴史が刻まれている。この祖師堂で入行会が行われ、いよいよ荒行堂に入る。雨の中、伝師を先頭に百四十数名の修行僧が列を作つて、荒行堂の正門である瑞門をくぐっていく。行列の最後に洋明上人がついて全体を見届けて堂内に入り瑞門の扉を閉めた。

今回、洋明上人は再行（二百日目）として初行僧の規律指導を行う責任者であり、自分の修行だけでなく若い初行僧の指導にあたるのである。肉体的、精神的に大変なことがある。

閉じられた瑞門は百日間、決して開くことはない。大勢の見送りの皆さんが、百日後二月十日までの無事を祈つて無言のまま帰り始めた。

*

ところで荒行堂の瑞門は、私たちにとつて特別な存在である聖教殿（しょうぎょうでん）の脇にある。この聖教殿に日蓮大聖人直筆「観心本尊鈔（国宝）、立正安国論（国宝）」をはじめ六四点の国の重要文化財が護られている。大聖人の最も大切なお書き物が目の前の塔の中、すぐそこに現存している、大聖人の熱い想いが伝わってくる。鎌倉時代から七百数十年間、この大切なご真筆・霊宝を護り続けてきた法華経寺の何代にも渡る歴



日蓮聖人直筆の国宝を護る
聖教殿（荒行団参りの写真）

代々御上人の

並々ならぬご苦勞と情熱を感じ取ること
もできる。

*

この聖教殿を真後ろにして、大勢の人波と共に石段を降りはじめ

た。その時である、からだの底からこみ上げてくるものがあつた。

全身が震え、突き上げてくる。思いっきり涙したい、そんな気持ちになつた。悲しいとか寂しいとかではない、何かもの凄いいものが響いてきた。大いなる感動であつた。

・・・

「老いた」と想つた。それは輝いていた。

*

その後、荒行団参、法務、正月を迎える様々な山務をお勤めし、多くの方々のお力を頂く中で、「老いる」ことは悪いことではないと思うようになっていた。ある初老の男性が話してくれた「わしゃあ、涙もろくなつてさあ。テレビで水戸黄門を観ても涙がでてくるさあ。歳だらかあ。」 若い時は意地を張らなければ乗り切れないこともある、歳をとればそんな必要もなくなる。本来の自分に還り素直になれる。素直、善いことだ。柔軟にありのままに受け止める、余分なものを落とす、ものが視えてくる、感動が多くなる、だから涙もでてくる。

*

きっとあの日、聖教殿のお祖師さまが「現実を柔軟に受け止めよ」とご教示して下さつたように想う。

お寺の庭に花いっぱい

昌子寺庭の山務日誌より

先日、法事でお寺にみえた若い方が「どこもかしこもきれいになっていきますね」と言われるので、思わず「掃除が趣味なんです」と答えてしまいました。するとその若い方は「私も今日、帰ったら早速 家の中を片付けて掃除しようと思います!!」と言われました。とても「良いことだな」と思いました。

*

最近気付いたのですが、掃除と瞑想(心の中を空っぽにすること)とは、とても似ているのではないかと思います。外の落ち葉掃きから始まり、次々とたまってゆく荷物を片付け、玄関、窓ガラス、トイレ等々とお寺の広い庭、庫裏を掃除することはとても大変なことです。それで必要にせまられて始めるのですが……。ですが、夢中になって汗を流して掃除をしていると不思議なんです。いつしか心の中のものもやしたのものや、いらいら

御志納金「一月〜二月」

小川 内山 真 殿 尊父葬儀砌
修善寺 杉山美智子殿 納骨の砌
修善寺 佐野園枝殿 納骨の砌

したものが消えて、自分が大きなものの中で生かされていることや、感謝の気持ちまでも湧いてきます。まるで知らず知らず、無意識のうちに自分の心を洗い出しているようです。

*

やるのがいっぱいありますけど今日も私は楽しくがんばっています。めずらしい椿みずき、そして古木の紅梅が咲き始めました。皆さん、ぜひ見に来て下さい。

帰山式

洋明上人の日蓮宗大荒行再行成満帰山式が二月十五日行われました。

この日を迎えるまで、本当に沢山の方々の励ましやお力を頂いてまいりました。二回に渡る激励団参、成満会お迎えと多くの方々から、荒行堂まで足を運んで下さいました。帰山式当日は本堂に入れない方も多く、ゆき届かなく申し訳ございませんでした。

帰山式を準備して頂いた御寺院の皆さま、伊東修護持会長さまはじめ役員の皆さまには何回も打合せして動いて頂きました。白龍

会の万灯・子供たち、お手伝いお迎えの皆さま方、そうした皆さまが、ただ大変だっただけでなく、本当に無事で良かった、私たちの手で洋明上人をお迎えできたと心から慶び誇りと自信を持って頂いたことは何より嬉しいことでした。誠にありがとうございました。



二月十日、百日間の大荒行成満

洋明上人は行僧の最後について、代表して瑞門(荒行堂の正門)を閉じました。立派なお姿でした。



「私のお上人さん、お疲れさまでした。」お迎えの人々。(大荒行堂 成満の日)

此度、日蓮宗大荒行堂二百日目の再行を佛天の御加護はもとより、皆様一人一人の御縁と御陰様の力に支えられ守られ無事成満、また本堂に入りきれない程の檀信徒、有縁の皆様を迎えて頂き帰山式を盛大に円成させて頂きましたこと、皆様には唯々感謝申し上げます。

行中の団参での励ましを頂き大変うれしかった事、日々皆さんが見えないところで手を合わせて下さった思いが通じこの胸に伝わった事、そしてお忙しい中、帰山式の準備や当日の御手伝いを頂いた事、一つが欠けてもこの成満は無かったです。

行中は、早朝三時から深夜十一時まで七回の水行、それ以外は鬼子母尊神の前で粗筵に端座合掌し読経三昧。一日二時間の睡眠と二度の御粥を啜り命を繋ぐ。それを信力と皆様のお蔭様の支えで乗り切る行でした。

初行の際は「あたり前は決して当たり前ではなく有る事が難しい、有難し」であることを学びました。今回の再行では、「荒行は能力ではなく、態度である」ことを学びました。御経や水行を上手に読め出来るのではなく、その一瞬一瞬に身心をかけ正面から真っ直ぐに向かう時、鬼子母尊神をはじめ、佛天、御先祖様はその姿勢を見てくれていることを改めて感じました。

この「能力ではなく、態度である」は決して荒行だけではなく、日々の生活にも言えることです。どれだけ得意であろうとも、どれだけ力があるろうとも、また決して不得意でも苦手であろうとも、一番大切なのはそこに向かい合う姿勢、態度なのです。

今回は、行規筆頭班長という大役を仰せつかりました。行規とは行堂の規律を順守させ、さらには初めての行僧の指導・訓育をする役です。「鬼面仏心」決して歯を見せることな

く鬼の形相で初行僧に接し、しかし心には仏の慈悲の心を宿す。初行僧が怠け心から怪我をしないように、水行の際も食の際も、いつもそばで見守ることを自らの行ともしてきました。正直、自らの行もあり、それに加えての行規としての行は、時に自らの懈怠心に負けそうにもなりましたが、後ろ姿で初行に示す「態度である」を心に留めて参りました。

その姿勢を初行はもとより、鬼子母尊神をはじめ、佛天、御先祖様、そして見えなくとも思いの通ずる檀信徒の皆様に見て頂いているとの思いが自らを奮い立たせて来たのだと思います。

今後は今行堂での貴重な経験を活かし、この後ろ姿で示す、また「能力ではなく態度である」ことを心に留めて皆様と共により良いより善い法住寺に出来るよう精進し、皆さんが安穏で心にいつも笑顔がある事を祈念して参ります。

お寺の年間計画 三月～十二月

ホームページから「法住寺のご案内」↓「行事ご

案内」でご覧下さい。